月刊

JMITU

ディスカ

機銃掃射痕（目黒不動尊 瀧泉寺 延命地蔵尊）

6月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2024 年発行

No,474

自民党裏金問題と政党助成金
選挙で変えよう都知事選挙

日本の政治が数十年に一度といわれる危機を迎えています。自民党内で裏金疑惑が浮上しており、政府はイメージの回復に躍起となっています。

自民党議員は政治資金パーティーを開催し、チケットの売り上げで政治資金を集めています。しかし、最近の問題は、所属議員がノルマを与えられ、達成するために企業や団体にパーティー券を販売していることです。ノルマ超過分の売り上げを、多くの自民党議員らは、懐に入れたり裏金にしたりしている疑いが持たれています。その収入を、政治資金収支報告書に記載していないことが問題です。

民間企業で行えば即、懲戒解雇に値する案件です。

岸田首相は信頼回復にと新た改正した政治資金規正法ですが、あまりに国民を馬鹿にした改正法です。明らかに政治資金問題を解決する気がありません。

政治資金の透明性向上：

政治資金パーティー券購入者の公開基準額を「２０万円超」から「５万円超」に引き下げる。パーティー１件当たりの基準額なので複数で分担して購入を何度も行えば、同じことになります。企業団体献金の抜け道を自ら作っていては問題です。国民には細かく税金を取っておきながら、５万円などは許されません１円から公開すべきです。

政策活動費については上限額を決めた上で１０年後に使途を領収書等により公開することが義務付けられました。

１０年後に公開では違法行為や不正が発覚しても、最近の事でさえ記憶にございませんという発言をする議員が多い中、その時には覚えていませんという回答が見え見えです。しかも政治資金規正法違反の公訴時効は５年です。また、１０年後に議員である可能性もあるかわかりません。活動費は即座に公開していかなくては意味がありません。

不透明な政党助成金

政党助成金は、日本の政党の活動を助成するために国庫から交付される資金です。

本来であれば使途の公表が求められていますが、現在は具体的には、資金の使途について適切な説明がなされていないケースがあり、政党助成金の使途が不透明であることが問題です。公正な政治運営を実現するためには、透明性を高める必要があります。

政党助成金は政党の主要な資金源となっていますが、そもそも指示していない政党へ指示していない人達の税金が充てられることも問題です。

総務省の発表では、２０２４年の政党交付金総額は３１５億３６００万円。自民が１６０億５３００万円で首位、

立憲民主が６８億３５００万円で２位だった。

これだけの額をもらっていながら、裏金で私腹を肥やすなど言語道断です。許せることではありません。

東京都知事選挙に行こう

自民党の裏金問題も政治資金規正法も数の力で押し切られ国民の思う方向には政治が向かっていません。「選挙に行っても変わらないよ」などという時代ではありません。今の日本を見ていれば一目瞭然です。政治に無関心なあまり今のような政権が自分の私腹を肥やすルールを作り、企業献金が政治をゆがめます。

国民には、増税や社会保障改悪と毎年２万人を超える自殺者数、能登半島地震での被災地支援遅れ、国民の方を向く政策を行わなければなりません。

その為に誰もが持っている権利が選挙での投票です。

今の都知事は、都庁に光を当てるプロジェクションマッピングで４８億円使っているにも関わらず、その庁舎の下で毎週行われている食料支援活動には一度も足を運ばず、都庁には光を当てるのに、困窮者に対しては光を当てないひどい都政です。

都知事選の投開票は７月７日です。

政治に無関心ではいられません。まずは投票に行きましょう。

職場におけるハラスメント

職場のパワーハラスメントやセクシュアルハラスメント等の様々なハラスメントは、働く人が能力を十分に発揮することの妨げになることはもちろん、個人としての尊厳や人格を不当に傷つける等の人権に関わる許されない行為です。また、会社にとっても、職場秩序の乱れや業務への支障が生じたり、貴重な人材の損失につながり、社会的評価にも悪影響を与えかねない大きな問題です。

職場における パワーハラスメントとは

令和元年に改正された労働施策総合推進法において、職場におけるパワーハラスメントについて事業主に防止措置を講じることを義務付けられ、事業主に相談したこと等を理由とする不利益取扱いも禁止されています。

パワーハラスメントは、職場において行われる

① 優越的な関係を背景とした言動。

② 業務上必要かつ相当な範囲を超えたもの。

③ 労働者の就業環境が害されるもの。

①から③までの３つの要素を全て満たすものをいいます。

典型的な例では暴行・傷害（身体的な攻撃）脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言（精神的な攻撃）隔離・仲間外し・無視（人間関係からの切り離し）など。ハラスメントは絶対に許してはいけません。

掌編小説

おぼつかなし

仙洞田一彦

いろいろと差し障りがあるから、場所も、時間も、人名も伏せて書かなければならない。友人から聞いた話をもとにして書いているが、他人事のようだから「私」が体験したこととして描くことにする。

場所も友人から聞いたところではなく、そこに似ている「私」が知っている所をもとにして書く。ここに書いた出来事が起こっているのは、その場所ではなくまったく別な場所だ。人物も、出来事も、場所も置き換えたものだから筋の通らないところがあるかもしれないが、それを前提にして読んでもらいたい。

そんなに隠したいことなら書かなければいいのにと言われそうだが、締め切りが迫っているのに、他に書くことが思い浮かばないから、こうなってしまった。容赦願いたい。

毎週週末、ある場所に集まって、翌週発行する新聞を作っている――くどいようだが、これは友人から聞いたことを別なことに置き換えているので、あくまでも誤解のないように――その新聞はＡ３判を二つ折りにした八頁建てだ。

新聞に掲載される原稿は依頼原稿もあるし、投稿もある。ここのメンバーが書いた原稿もある。

作業が終わった後、ご苦労さんということで、軽く一杯やる。帰るのはだいたい夜の八時前後だ。その晩は、作業所から出てすぐ別方向に帰るＡが私と並んで歩き始めた。めずらしいことと思ったが、「ついて来るな」とは言えないし、言う必要もない。ついて来る理由を聞くこともない。要するにどうぞお好きにということだ。

Ａが話し掛けてきた。

「最近、気になることがある」

「え？」

それなら前置きなしに早く言えと思ったが、もしかするとＡの独り言かもしれない。しかし、Ａは続けて言った。

「Ｂさんの間違いが増えてきた」

「ふうん」

私は答えた。Ｂは仕事がそれほど正確ではない、はっきり言えば間違いが多い。だから、あいまいに答えた。

「前もひどかったけど、最近、入力間違いがひどいんだよ」

Ａが言った。新聞は原稿をパソコンに入力して作る。私はいつも通りと思ったから、上の空で「そう」とだけ答えた。心配事が別にあれば、入力間違いが多くなるから私は答えた。

「心配事でもあるんじゃないの」

私は言った。

「あいつに心配事なんてあるもんか」

Ａは言った。あいつとはＢのことである。作業メンバーはお互い遠慮のない間柄だったから、言葉も雑になる。

「そうか、あるはずないか」

私もＡの言葉を否定しない。

「間違いが増えたのはボケの

せいじゃないのかな」
Aが言った。
「ボケてるのは前からだ」
私が言って笑い、Aも一緒に笑った。しかし、Aは首を傾げて振った。その動作は、ボケが冗談ですむレベルではないことを示すようだ。

その翌週か、翌々週か。また帰りがAと一緒だった。
「Cさん、俺が校正したのを全部直さないんだよ」
入力された原稿が間違いなく入力されているかも含めて、文字や言葉がただしいか点検、直すのを校正という。直すところを赤いボールペンで記入、印をつける。
「例えば五ヶ所指定するけど二ヶ所しか直さないんだよ。それが一回や二回じゃない」

この話を聞いた時、前にAがBのことを言っていたのを思い出した。
「Cさんは直す必要ないと思ったんじゃないの」
私は言った。Aは直すべきだと思ったが、Cは直す必要ないと思ったかもしれないからだ。
「いや、そんなことはない」
Aは私の言葉を否定した。そして続けた。
「意地悪してんじゃないの」
私は冗談のつもりで言った。Aは笑わずに真面目な顔で答えた。
「分からなくなってるんじゃないかな。Bさんと同じでありもボケてるんだよ。だから、自分では直したつもりになっている」
私は返事をしないで、私以外五人のメンバーの顔を思い浮かべた。みんな七十歳を超えている。七十歳以上の何人に一人がボケているのか知らないが、それは平均であって、ボケているのだけが集まっている場合だってあるかも知れない。でもBもCも、私から見るとそんな感じはしない。

翌週か、翌々週。作業所に行ったらD一人だけがパソコンに向かって入力作業をしていた。
「みんなは」
「出かけてる。もう帰るころ」
Dはパソコンに向かったままで答えた。私はDが入力作業している脇に立った。入力作業、校正か、印刷作業もある。その仕事を聞くためだ。Dは、入力作業をしながら言った。
「いま、Aさんの原稿入力してるんだけど、全然意味が分からないんだよね。とりあえず、そのまま入力しようと思ってるんだけど。Aさん最近おかしいんじゃないのかね」
私はディスプレイに目をやって読んだ。
「このくらい、前からだよ」
私は画面で読んだ感想を言った。
「いや、確実にひどくなってる」
「そうかなあ」
私はディスプレイを見たままそう言いながら、AがBとCのことを言っていたのを思い出した。AはBとCがボケたと言っていたが、本当はAの方がボケてしまったのかなあなどと考えた。

「じゃ、その原稿、入力して」
Dは、机の上の原稿を指差して、私に言った。
「わかった」
言われた原稿を取り上げたとき、みんなが帰ってきた。私は椅子に座り、机の上に原稿を置いて、ボールペンに手を伸ばした。視線を原稿に落とすと既に赤ペンが入り、校正が済んでいた。
「あれ、俺、何するんだっけ」
私はDに聞いた。
「入力」
「そうか」
「そう言ったじゃん」
「そうか」
「やっぱ、若い後継者に、早く代わってもらわなきゃだめだね」
Dが言った。私は委縮して声も出ない。原稿を持って、パソコンの置いてあるところに向かった。
アメリカの大統領選の討論会で、現職の大統領の反応が鈍くなっていることがニュースになった。八十歳を超えているというから無理もないかもしれない。大統領と比べるのもなんだが、私も人の名前が思い出せなくなって大分久しい。また、立ち上がった途端、何の用事で立ち上がったか忘れてしまうようになっても大分経つ。Dの言うように、早く若い人に代わった方がいいかも――
それぞれいつもの仕事をしていて時間が過ぎた。
「あれ、Eは」
「道に迷ったんじゃないの」
誰かが言い、誰かが答えた。
「急に暑くなったから、熱中症で倒れてるかも知れんぞ」
心配の言葉が出てまもなく、ドアが開いてEが入って来た。
「いや、急に足が痛くなって、歩けなくなった」
「本当は道が分からなくなったんじゃないの」
「いや、道はわかってます。これが本道だって」
誰かが言い、Eが答えた。私はEが「本道」の意味を知っていて言っているのか疑問だった。
印刷したり、折ったりといつもの作業が続いた。
「大丈夫」
声が掛けられ、誰かが私の肩をたたいた。
「ぼうっとしてたよ」
Cが言った。
「ああ」
私は言った。いつの間にか気を失っていたのだろうか。でも刷り上がった新聞を折る手は動いていたのではないか。
「だいじょうぶか」
「大丈夫だ」
誰かの声に、少し声を大きくして答えた。
そして作業が終わり、いつものように軽く一杯やって帰宅の途についた。歩いた時間を考えると、もう家に着いてもいいはずなのに着かなかった。いつまでも家に着かないと思ったら、公園のベンチに腰かけて居眠りし、歩いている夢を見ていたようだ。
初めに大袈裟な断りを入れて書き始めたものの、何が何だか分らなくなってしまった。見上げると雲間から星が一つ見えた。あの光ってるの星だよなと、ひとり念を入れた。